

論文の和文要旨

論文題目 現代ジャワの若者におけるジャワ語敬語使用の状況

氏名 エリザベス エスター フィブラ シマルマタ
ELYZABETH ESTHER FIBRA SIMARMATA

本研究は、複雑な敬語規範を持つジャワ語について、実態調査とその結果分析を通じて、現代ジャワの若者の敬語使用の状況を明らかにした。世界で敬語体系が発達している言語として日本語と朝鮮語が知られているが、このような体系的な敬語の発達は、ジャワ語にも見られる。ジャワ語は日本語と同様に、複雑な敬語の規範を持っている言語とされ、日々の生活において、様々な異なった階層で丁寧さと敬意を表す手段として敬語が用いられている。

インドネシアの社会は1300を超える民族から成り立っており、それぞれの文化や習慣が異なる。多民族国家であるインドネシアでは、公用語であるインドネシア語の他に地方語も使われており、二言語話者（バイリンガル）が多く見られる。中央統計庁によると、ジャワ語話者は7600万人以上いるとされ、彼らの多くはインドネシア語との二言語話者である。

そのなかで、現代ジャワの若者は、ジャワ敬語を規範通りに運用できなくなり、敬語の使用を避けることが増えるなど、敬語離れが一段と進んでいると指摘されてきた。先行研究では、ジャワ語の発話レベルの複雑さと若者らが使用を回避する傾向があることが指摘されている。しかしながら、これまで現代の若者のジャワ語使用に関する実態調査に基づいた研究はなされてこなかった。そこで本研究では、ジャワ敬語に対する運用能力がどこまで低下しているのか、その実態を明らかにすることを試みた。データとしてはアンケート調査だけでなく、取材インタビューや観察、文献資料を用い、ジャワ敬語の現代の状況をみていくことにした。

まず、本研究の課題をより明確にするために、筆者はこれまで、インドネシアにおいて最も高い教育水準を持つと知られる国立ガジャマダ大学の学生を対象に調査を実施した。若者の中でも知識人として認められる集団を、ジャワ人の若者の代表として取り上げ、敬語認識と運用について分析した。現地調査は2011年にジョグジャカルタ市のガジャマダ大学において実施した。

一回目の現地調査では、ガジャマダ大学の学生に対して敬語認識に関する調査を行い、複雑な敬語規範を持つジャワ語が、現代の若者によってどのように使用され、また変化しているのかを社会言語学的視点から考察した。この調査の成果、ジャワの若者は、敬語に対する認識は持っているが、使用についての知識はあまりもっていないことが明らかとなった。また、その要因としてジャワ語の教育に問題があることを指摘した。多くの学生は学校でジャワ語を学ぶよりも、近所の付き合いなど、日常生活での経験を通して敬語を身に付けるという。さらに若者の間では会話の中で丁寧さが伝われば十分だと

認識されており、敬意よりも丁寧さを表わす言葉を用いる傾向があることが明らかとなった（以上の調査結果は、筆者の修士論文（2012年）で取り上げている）。

本研究は分析と考察の内容から、大きく三つの部分に分かれている。まず、複雑とされているジャワ語の敬語体系と分類法についての異なる捉え方を整理する。ジャワ語研究者の先行研究に基づいて、敬語法における語彙レベルと発話レベルがどのように成り立ち、どのような仕組みをもっているのかを説明する。ここで、敬語表現の基準として日本語の敬語研究も取り上げ、ジャワ語における仕組みと比較する。また、先行研究で語られている敬語の使用状況についても、本研究とどのような関わりを持つのかを明らかにした（2章）。次に、ジャワの若者の敬語使用の状況について述べる。先行研究でこれまで行ってこなかった実態調査を本研究では徹底的に行い、その結果を報告する。具体的には、若者を大学生の集団と高校生の集団に分けて、それぞれについて実態調査を行った（3章）。最後に、ジャワの高齢者の敬語使用の状況を明らかにして若者に比較する。その結果、ジャワの若者の間でより簡素化した敬語体系の現象が出現していることを明らかにする（4章）。以下、本研究の中心となる第3章と第4章の概要を詳しく述べる。

本研究はまず、先述の一回目の調査に続いて、二回目の調査では2013年に、若者の敬語使用の運用実態について調査を行った。ここではジョグジャカルタ出身と他州出身のジャワの学生（計245名）について規範的な敬語を使用できなくなっているという現状を実証するために、アンケートを用いてその正誤用法に関する実態調査を行った。アンケートでは、大学生が年齢と地位が異なる相手と話す場面を設定し、それぞれの場面について丁寧さと敬意度の異なるジャワ語の27文体を用意し、その中から普段自分が使う文体を選んでもらうという方法を用いた。学生の敬語の運用実態について分析しているが、「規範的とされる」基準とされた文体は、ジャワ語の専門家に決めてもらい、学生の回答と比較しながら考察を行った。

分析結果からは、ジョグジャカルタ出身と他州出身者の間で敬語の運用能力に大きな差は見られなかったが、各問の回答からみると、他州出身者よりジョグジャカルタ出身者の方が、敬語をより上手く使いこなせることがわかった。尊敬語の使用に関しては、多くの学生が一定程度理解しているようにも見えるが、学生たちは複数の文体を使用すると回答しており、必ずしも規範的だとされる文体だけを使用しているとは言えない。また、謙譲語については、自分と相手のどちらに対して敬意を表すのか、敬意を示すべき相手をどのように持ち上げるかなど、その使い分けを十分に理解できていない学生が多かった。特に注目すべきことは、そもそも敬語を用いて高い敬意を表すことを求めない、その必要性を感じていない学生が増加傾向にあることが明らかになった。

次に、2014年に実施した三回目の調査では、学校の正規科目としてジャワ語の授業を受けているジョグジャカルタ州の農村部と都市部の高校生（計814名）を対象に調査を行い、敬語の運用実態を分析した。高校生が敬語離れているかを実証するために、敬語使用の正誤用法に関するアンケート調査を実施し、若者の敬語使用の傾向を明らかにした。アンケートの内容と方法は大学生の場合と同じである。また、ジャワ語の専門家に加え、

社会人として地位をある程度持っていると思われる一般の高校教師による「規範的とされる」敬語使用とも比較して分析を行った。

分析結果からは、概ね大学生と同様に、規範的な敬語を使いこなせない高校生が多かった。しかし、都市部の高校生や大学生と比較すると、農村部の高校生の方がジャワ語の敬語を規範的に使いこなせる傾向があることが明らかになった。敬語運用能力の低下傾向は特に都市部の高校生に見られ、彼らは敬語を捨象した「丁寧ではない」ジャワ語を使用している。この背景には家庭での環境や使用言語が影響していると言える。また、丁寧ではないジャワ語は日常的に使用されているものの、地方語よりも公用語のインドネシア語や国際語（英語）を学ぶ方が将来の就職に有利などの理由で、若者はジャワ敬語の使用から遠ざかっていることが分かった。

最後に、ジャワの高齢者の敬語使用の状況について調査を実施し、若者と比較を行った。高齢者への調査は年齢的な要因もあったため、若者や教師のように詳細なアンケート調査は行わず、一対一の非構造化インタビューを農村部のクロンプログ県に位置するトゥモンクロン村において 2 カ月間に渡って行った。インドネシアの植民地時代／占領時代で経験したジャワ語の習得事情により、調査対象者を 78 才以上と 60～77 才の枠に分けたうえで、高齢者たちがどのように規範的な敬語使用を身に付け維持してきたのかについて分析を行った。

ジャワの高齢者への聞き取り調査からは、高齢者たちが、現代の若者はほとんどジャワ語の敬語を使用していないと認識していることが分かった。比較分析の結果から以下のことが言える。若者は、非丁寧なジャワ語を日常的に使っているが、インドネシア語と混ざる場合も多い。また、若者はジャワ敬語の使用から逃れようとしている。敬語には多様なレベルがあり、若者にとってこのレベルの中から規範的な文体や正しい語彙などを決めて使い分けるのは極めて難しい作業である。次に、若者は誤使用のリスクに不安を抱いている。敬語を誤って使用すると、相手に対して失礼にあたるため、若者の多くは敬語が必要と認識していながらも、敬語の使用に自信がないため、使用を避けるようとする。

実際、ジャワ若者の間で起きていることは、敬語の誤使用は避けつつ尊敬すべき相手に物事を伝える方法としての簡素化した敬語の使用である。簡素化した敬語とは、1)「家の敬語体」つまり、家の中や周辺/近所で使われる決まったパターンのシンプルな敬語を用いることと、2)「簡素化した敬語体」つまり、会話の中にインドネシア語へのコードスイッチングを行うことを指す。後者の場合、コードスイッチングをすることによって、丁寧な伝え方でありながら、より中立的な敬意の表し方ができるとジャワの若者は認識している。これについて、本研究では、さらに高校生のみを対象に調査を行い、高校生たちが日常的にどのような言語を使うか、家庭での使用言語を調べた。さらに、簡素化した敬語はどれほど普及しているのかについて調査を行い分析した。

結果分析からは、農村部の高校生は都市部の高校生よりも高い頻度で、家でジャワ語を使用していることが明らかとなった。いずれの高校生も、家でジャワ語を使うが、都市部の方が、敬語体ではなく、非丁寧なジャワ語とインドネシア語を混ぜて使用することが最

も多かった。さらに、ジャワ語を使わずに、家でインドネシア語のみを使用する都市部の高校生が次に多かった。このように、敬語使用に関して、農村部より都市部の高校生の方が、先に変化していくことが明らかになった。

次に、簡素化した敬語の結果分析からは、「家の敬語体」はまだ広く認知されていないが、農村部では1割以上、都市部では3割弱の高校生が聞いたことがあるということに着目したい。これと対照的に「簡素化した敬語」は高校生によく知られており、農村部では8割以上、都市部では7割以上の高校生が聞いたことがあると応じた。高校生のなかでは、複雑な敬語体系より、無難で使いやすい簡素化した敬語体の方がこれから広まりつつある可能性がある。高校生は、インドネシア語にコードスイッチングをすることによって、ジャワ敬語の誤使用を回避しながらも、十分に丁寧な文体でメッセージを伝えることができると考えており、これは丁寧語化の現象として研究する必要がある。

井上(1999)は、日本語にも同様の丁寧語化の傾向があることを報告している。井上によると、現代日本語で最も注目される現象は、尊敬語を使うべき場面で謙譲語を用いることが、多くの人々が誤りであると気づいているにも関わらず、多用されていることである。一方、ジャワ語の敬語使用においては、都市部の高校生が、謙譲語を使うべき場面で尊敬語を用いることが極めて多い。これらは、いずれも文章全体を丁寧にしようとする意図に基づき、井上の言う丁寧語化の傾向として理解できる。

本研究におけるジャワ若者の敬語使用の分析からは、敬うべき相手に敬意を表す敬語を用いる若者は確かに一定程度いるものの、準丁寧の語彙を使用する若者も少なくないことが明らかになった。また、都市部の高校生については、非丁寧体を使用する生徒も一定程度見られた。さらに、簡素化した敬語体の分析からは、敬語体にインドネシア語を混ぜて話すという新しい体系が、十分に丁寧な話し方として若者によって好んで用いられていることが明らかとなった。このように、敬語が発達しているとされる日本語及びジャワ語において、敬語の丁寧語化が広がる傾向が見られる。このことが何を意味するのかについては、今後の検討が課題となろう。本研究は今後のジャワ語の研究に貢献できだけでなく、ジャワ語以外の言語に見られる敬語の研究全般にも、貴重な実態データを示すことができると考える。